

大阪弁の「こまんじゃこ」*

田辺聖子『大阪弁ちゃらんぼらん』を読んで

福盛 貴弘

On ‘*komanjako*’, which Means Kid or Brat.

Takahiro FUKUMORI

要旨：本稿は、田辺聖子さんが執筆した『大阪弁ちゃらんぼらん』(1978年、筑摩書房：本稿では中公文庫刊1997年改版)を読んだ私の読後感を記したエッセイである。田辺聖子さん(1928-、大阪府大阪市此花区；現在の福島区)と私(1970-、大阪府大阪市城東区)は42歳差になるが、大阪弁の世代差を感じつつ、私自身のことばや当時の風俗を書き記している。ここでは、7章めに記された「こまんじゃこ」のエッセイをもとに、子どもの頃の日常生活、駄菓子屋、祭り、夜店などについて振り返っている。

キーワード：こまんじゃこ がめこ アイスクリン あてもん イケズ グリコ

「こまんじゃこ」pp.74-84

さて困った。この表現は、全く知らなかったんで。だから、説明なく言われたら、ちりめんじゃこの親戚と考えただろう。実際、もともと「^{こまんじゃこ}細ン雑魚」(p.74)で、小さい魚を指していたようだ。ハヤ、モロコ、フナ、メダカのような小魚からの派生語である。

「この、こまんじゃこが……」という表現は可愛いなあ(p.75)というプラスでも、蹴ちらす語感(p.74)というマイナスの意味でも言うことができる。私の内省では、「ガキ」や「ジャリ」はプラスでは使いにくい。「このガキが」「このジャリが」は悪意を持って使うのが多数である。

昭和初期、地位が低かった子どもは「米喰イ虫」(p.75)と呼ばれていたようだ。私は「金喰イ虫」とは言われたが、「米喰イ虫」という言い方は知らない。

「こまんじゃこ」の章は知らない言葉が続くので、それに対して自身がどう言っていたかという確認が続く。

こまんじゃこの生き甲斐は、学校から帰るや、平べったい大きな一銭銅貨を一枚握りしめて、駄菓子屋へ走ってゆくことである。この駄菓子屋はなぜか、姓を呼びつけにされ

る。「イノウエで賣うて来」「ムラタへいってくる！」などという。(p.76)

私の大阪に住んでいた頃の生家から最も近い大阪市城東区関目 5 丁目の駄菓子屋は、姓ではなく「がめこ」。10 円落としたら、「うちの金や」と言われるくらい、がめつかったから。子どものネーミングセンスは、秀逸だがひどいものである。ちなみに、「がめこ」の正式名称は結局最後まで知らなかった。

わらび餅のような「ベロ」(p.76)は食べたことがない。おそらく合成着色料による鮮やかな色が生理的に受け付けなかったんだろう。

「写し絵」(p.76)というのは知らないが、入れ墨シールのようなものか。こちらも生理的に受け付けないので、自身が関わったことはない。

紙芝居は街中で見たことはない。はじめて観た紙芝居は幼稚園の時の「アンパンマン」であった。

* * * * *

「こまんじゃこ」のアクセントは、LLLHL。

これは知らない単語だから、使っていた世代からしたら違うかもしれない。

ちなみに「ちりめんじゃこ」は、HHHHHL。

「じゃこ」の「じゃ」の後の下がり目は間違いない。

なお、「がめこ」は LHL。

関目商店街に向かう信号で、右が大村ビルなので、左に進んでちょっと行ったあたりにあった。今はない。

* * * * *

子どもの頃は 1 の付く日に夜店が出ていた。ただし、31 日はのぞく。2 日連続になるからだろう。1 の付く日やったら、10,11,12,13..... これをやったら、花紀京さん¹のネタになってしまう。

p.76 に「しんこ細工、洋食焼き、しがらきわらび餅」と出てくる。親から夜店でものを買って食べてはいけなかったと言われていたので、食べたことはない。しんこ細工というのは、白米から作った団子のような餅に着色して干支や縁起物の形にしたものらしい。全く知らなか

¹ はな き きょう 花紀 京 (1937-2015、大阪府大阪市天王寺区出身)、漫才師横山エンタツ (1896-1971、兵庫県三田市出身) の次男。作家の はな と こぼこ 花登 筐 (1928-1983、滋賀県大津市出身) に弟子入り後、笑いの王国を経て、1960 年代から 1980 年代にかけて活躍した吉本新喜劇の座長経験者。新喜劇以外の舞台の客演でもひっぱりだこ。90 年代以降は映画やドラマで活躍。2001-2002 年はダウタウンらと一緒に Re:Japan に参加した。

った。

洋食焼きはさすがに分かる。水溶き小麦粉に野菜を少し足して焼いたもの。夜店で買ったことはないが、そこらの店で焼いてたんで、割と食べてた。

わらび餅は家ではよく食べたが、しがらき餅は食べたことがない。もち米を砕いて白い袋に入れて茹でたものらしいが、見たことがない。

田辺聖子さんの子どもの頃(1930年代)は天神祭の時は十銭もらって行ったそう。私は、子どもの頃(1970年代)100円をもらって、夜店や祭りに行った記憶がある。ただ、ものを食べないので、金魚すくいか型抜きかあてもんかのどれか。金魚は20cm近くまで育ったのを覚えている。

型抜きは、硬い板状のお菓자에溝が掘ってあり、指定された形に仕上げるもの。針でちまちま削るのだが、へたくそなんで大抵途中で割れてた。なお、お菓子なんだが、食べたことはない。食べたい気持ちにどうしてもなれなかったんで。

あとは、なんかひもを引っ張って、商品が吊り上がるあてもん。大抵しょうもないのが当たってたので、いい記憶がない。

* * * * *

夏の天神祭などは十銭がもらえる。大家族のありがたさ、父が十銭、母が十銭、祖父が十銭、その他いろいろ、五六十銭は手に握ることができる。絹の長袖の夏の春着を着せられて、天神サンへ走ってゆくときの、天にもものぼらんばかりの心ときめき。(p.77)

そういう大金の入ったときには、アイスクリンが買うことができる。(p.77)

今の感覚なら、500~600円ぐらいもらったということだろうか。昭和末期を子どもとして過ごした私でも、さすがに天にはのぼれない。そのうちなんぼ使うんか分からんけど、たっかいアイス食うんやなど。夜店や祭りでそなんん売ってたんかなあと素朴に。

ところで、「アイスクリン」。昭和末期の大阪では見かけなかった。高知に旅行した時に、高知城の公園や海水浴場などで見かけた。じゃりん子チエのテツ²が、バイトでアイスクリン売りをしてた。そしたら、昭和中期までは、大阪でも「アイスクリン」という言い方が普通やったんやろうか。でも、アイスクリンって、シャーベットみたいなもんやから、アイスクリームとは違うよな。だから、現代日本語の外来語としては、両者は別もんやと思う。

さて、この関連で「あてもん、ヨタモン、バケモン」のように、大阪弁は語尾を跳ねると

^{えつみ}
² はるき悦巳(1947-、大阪府大阪市西成区出身)による漫画『じゃりん子チエ』(『漫画アクション』双葉社にて1978-1997に連載)に出てくる主人公チエの父親である竹本テツ。推定で1942年生まれ。博打と喧嘩にあげくれる無職の設定だが、それでも子どもの頃はバイトしていたというエピソード。単行本(双葉社/アクションコミックス、全67巻)第2巻(1979:96-97)ではアイスクランディーを売っている絵だが、第26巻(1985:167-168)では昔取った杵柄でテツがチエにアイスクリンの発音を指導している。

いう話³になっているが、これらは「モノ>モン」なんで、アイスクリンとは違う次元。アイスクリンというのは、はじめからアイスクリンで、クリームから日本語の外来語として音韻変化したものではない。臨海丸の使節団が、「アイスクリン」と言ったのがはじまり⁴。何か共通点を見つけようとするのは分かるけれども、こういうところはしょうがないかも。ただ、おまけ話でまた知らない言葉が出てきた。

先の3つ「当てもん、ヨタモン、バケモン」は私も使う。しかし、お喋り屋のことを「シャベリン」(p.78)というのは、今まで知らなかった。なんか、がいらしい言い方やなと思うが、現実にはめんどくさいやっちゃろな。おしゃべりって子どもと大人では、全く様相が異なる。ただ、どっちにしても、のべつまくなしに喋っている感じ。そして、かしましい、やかましい、けたたましいの合わせ技に決まっている。だから、やっぱりめんどくさいやろな。

* * * * *

「アイスクリン」のアクセントは、HHHLL。

「あてもん」はHHHH、「ヨタモン」はLLLH~LLHH、「バケモン」はLLHL。

* * * * *

「ゲラ」というのはよく使う。ただし、活字の版を入れた木箱でも、校正刷りでもない。よく笑う人間のことを「ゲラ」と言う。「ゲラゲラ」から来ているのは言うまでもない。なんでもかんでも笑ってたら、「あいつゲラやなあ」という言い方をする。ただ、これはこまんじゃこ、すなわち子どもにだけに使う言葉ではない。大人でも子どもでも、老若男女関わらず、そのラベルを貼ることができる。

この手の類で、「チョコカ」「ガサ」「ノラ」(p.78)というのがあったらしい。「チョコカチョコカ」「ガサガサ」「のらくら」を縮めて名詞にしたもの。落ち着きなく動くのが「チョコカ」、荒々しくなると「ガサ」。私は「ちょこまか」は使っても、「チョコカチョコカ」は使わない。「ガサガサ」は分かるけど、粗暴というよりゴキブリのイメージ。「ノラ」は聞いたことはあるけど、私の子ども時代だと、子ども同士でも使ってなかった。

少し毛色が変わるが、ついで「ゴンタ」と「イケズ」(p.79)。「ゴンタ」は腕白でもいい、たくましく育ててほしいタイプの男の子に使われる。「ヤンチャ」ということばはある時期からものすごく嫌いになったが、「ゴンタ」はものすごく嫌いな言葉ではない。人としては共に嫌いだが。「イケズ」は、ひねくれた意地の悪さなんで、女の子に使うには早すぎる。「イケ

³ 査読者からの指摘で、「俺のん(=俺のもの)」という語形が挙げられた。ここでは、「ノ>ン」についての例を示しているが、「俺のん」は共通語のように「俺の」ではすっきりせず、「俺のん」「僕のん」「私のん」「君のん」「うちのん」「由香里のん」「花音のん」「のんちゃん」のように「ん」を加える方が普通である。「ん」がないと、大阪弁としては不自然である。なお、「ノ>ン」による「俺ん」「由香里ん」という言い方があるが、私の内省では自身では使わないし、大阪弁ばくない。

⁴ 日本アイスクリーム協会 <https://www.icecream.or.jp/ice/history/japan01.html>

ズの真骨頂は、姑、ハイミスの上司、女のハイミス」(p.79)には一理あるかも。芸妓さんや舞妓さん、あるいはホステスさんが客に「イケズやわ」と言ってる場合は、ほんまにイケズではないだろう。ちょっと余計な一言にいう台詞の定番。「意地悪ですね」というより、かいらしい。そして、この「イケズ」の言外の意味は、「(来れないなんて言わないで、しっかり稼いで)また来てね」なんで。

* * * * *

「ゲラ」のアクセントは、LH。

「イケズ」はLHL。「ゴンタ」はHHH。

* * * * *

一も二もない三びんが 知りもせんこと ごじゃごじゃと
ろくでもないこと 七面鳥 はったるか、食うたるか、どんでいけエー (p.80)

いつの時代にも数え歌はあるものである。この手の罵詈謗のものはじめて知った。私は「ごじゃごじゃ」やおて、「ごちゃごちゃ」やろなあと。

一つ二つ禿がある 三つ醜い禿がある 四つ横にも禿がある
五ついつもの禿がある 六つ向こうに禿がある 七つ斜めに禿がある
八つやっぱり禿がある 九つここにも禿がある 十でとうとう禿ちゃびん

これは、私が覚えている数え歌だが、汎用性はない。そして、これを人相手に使える機会はめったにない。

アーメン、ソーメン、冷やソーメン
蜜柑、金柑、こちゃ好かん (p.81)

前者は私も使っていた。だが、教会を通る時にはない。単純に素麺を見た時に使う、ただのブリッジに過ぎなかったと思う。

ヨロガワノ、ミルノンレ、ハラ、ララクラリ (p.81)

河内弁を諷したもののようで、「淀川の水を飲んで、腹ダダ下り」を指す。ダ行がラ行になる河内弁の癖を使っている。私は知らない表現。ダガラになってしまうのは、舌先が歯の裏～歯茎あたりに接触する時間が短いから。試しに、「アダナ」「アラナ」、「ウドン」「ウロン」

と発音してみれば実感できる。

指切りかみきり、嘘ついたもんは、深い川へはめよか、浅い川へはめよか、
 どうでも大事^{だいじ}ない、深い川へどぼーん (p.81)

いわゆる「指切りげんまん、嘘ついたら針千本飲ーます」の大阪弁バージョン。これも全く知らない。どの世代までが使っていたんだろうか。しかし、ひつこいぐらい長いな。なんかはじめから深い川に誘導されているのが怖い、針千本よりはましかもしれない。いや、ましでないかも。

メメズもカエルもみな、ごめん (p.81)

子どもにしょんべんをさせる時に言う言葉。ミミズやカエルに謝るんやから野しょんべんか。都会暮らしが長い私には分からないのどかな表現である。

これは日常生活より、坂田利夫さん⁵のネタで脳内に焼き付いている。「ミミズもカエルもみなごめん しょんじょろりーしょんじょろりー しょんじょろりーのぱっぱ」

アホの坂田こと坂田利夫さんは、時々昔のネタを使いまわす。「あなた知らないのオホホン」がルーキー新一さんのネタであることを知っているのは、私より上の世代が多いはず。

とかく、こまんじゃここと子どもというのはろくなことを言わないものである。だから、子どもなんだが。

* * * * *

「メメズもカエルもみな、ごめん」は、LLLH LLLH HL LLH。

* * * * *

「例の大阪弁のくせで、小便というべきところを、しょんべんと跳ねるのがよろしいな。」
 (中略)

「その代り、はねるべき大根、などというコトバ、はねないでやわらかく、おだいといたりしますよ」

今日の年中行事の1つ、12月の鳴滝の大根たきも、「だいこたき」である。(p.82)

⁵ さかたとしお 坂田利夫(1941-、大阪府大阪市港区出身)吉本新喜劇研究生を経て、1967年から2009年にかけて活躍した漫才師。コンビ名は「コメディ No.1」、相方は^{まえだごろう}前田五郎(1942-、大阪府大阪市港区出身)。コメディ No.1は2009年に解散したため、現在はピン芸人として活躍。

でも、「小瓶」は「しょんびん」ではなく、「しょうびん」である。おっと。東京は「こびん」と言うそうだが、大阪は「しょうびん」。東京人に「小便頼んでるみたいで」と言われたが、「大中小」は「だいちゅうしょう」だからしょうがない。むしろ、「おおびん」「こびん」なら、「なかびん」と言ってもらいたいものである。

「おだい」「だいこ」(大根)は、私は言わない。同様に「おにん」「にんじ」(人参)、「おれん」「れんこ」(蓮根)、「おみか」「みか」(蜜柑)、「おメロ」「メロ」(メロン)、「おうど」「うど」(うどん)、「おプリ」「プリ」(プリン)とも言わない。言う人がいるかも定かでない。

食べ物に「お」をつけるのはいくつかあげられる。p.82 にあがっている表現を内省してみる。

- | | |
|------------------|--|
| 豆サン | お豆さん
「お」をつければ「さん」もつけれるが、「お」無しでは無理。 |
| お芋サン | お芋
「お芋さんは」言わない。「芋さん」はもっと無理。 |
| お菜サン | 「お菜」も無理。 |
| お粥さん | 「おかいさん」は使わなくはない。
「かゆさん」「かいさん」は無理。
今は「さん」無しの「おかゆ」を主に使う。 |
| お揚げ | 「揚げさん」は言える。
「お揚げさん」「お揚げ」は使わない。 |
| お汁 ^{つゆ} | おつゆ
今はみそ汁のことをおつゆとはあまり言わなくなった。 |

* * * * *

- 「しょんべん」は、HHHH。「しょうびん」は、HHHH。
「お豆さん」は LHLLL、「豆」は LH。
「お芋」は LLH、「芋」は HL。
「お粥さん」は LLLHH、「お粥」は LLH、「粥」は LH。
「揚げさん」は HHHH。
「おつゆ」は LHL、「つゆ」は LH。

* * * * *

「そういえば、大阪のシャレに『グリコの看板でバンザイヤ』というのがありましたね」
「うん、お手あげ、降参、投げ出したというときに使う。」 (p.83)

ミナミにあるグリコの看板が元になっている。体操着を着た男がゴールした際に両腕をあげ万歳したポーズの看板。左足も上がって、静止画状態なので、右足の片足立ちになっている。これをバックに観光客がひっかけ橋⁶でおんなじがっこして撮ってる。

私も最近は大阪に行くと観光客になってしまったが、これをやる気にはなれない。私になじみの4代目ならやってもいいが、先代はなくなり、今は6代目なんで。

閑話休題。私が使う時は、「もうグリコやな」というシンプルな使い方。パソコンで両腕が痛くなって腕も上がらず「グリコやな」。

* * * * *

「グリコ」は、LHL。「おてあげ」は、LLLH。

* * * * *

この章終わり。

謝辞

* 本稿は、ココログ「福盛です。」(<http://fukumori-desu.cocolog-nifty.com/blog/>)に掲載された『大阪弁ちゃらんぼらん』『こまんじゃこ』を読んで」その1(2016年7月26日)、その2(8月1日)、その3(8月13日)、その4(8月14日)、その5(8月26日)、その6(8月29日)の加筆改訂版である。自身の母方言に対していろいろ思い出しつつ、素朴な基礎資料として記しておこうというリハビリを兼ねたエッセイである。そのため、文中に出てくる大阪弁に関する言い回しをそのままにしてあることについては、本稿の性質上ご了承ください。また、引用に関しても表現の変更は行っていない。なお、田辺聖子さんと面識はない。

こういった性質のものでも掲載を許可していただいた編集委員諸氏ならびに査読者に感謝の意を申し上げます。

参考文献

田辺聖子(1978)『大阪弁ちゃらんぼらん』筑摩書房(本稿では中公文庫刊1997年改版)

執筆者紹介

氏名：福盛 貴弘

所属：大東文化大学外国語学部

Email：ICG01649@nifty.com

⁶ どうとんぼりがわ道頓堀川にかかっている えびすばし戎橋の通称。この橋の上でナンパが繰り広げられていたことから、「ひっかけ橋」と言われるように。昔に比べたら、今はそうでもなくなっていると感じた。なお、私は「ねえちゃん、茶しばけへんか」と一度も言ったことはない。